

ぱーとなー

2005年12月
第49号

耳原総合病院の理念

耳原総合病院はこんな医療をめざしています

◎ 安全・安心・信頼の医療

私たちは患者様とともに力を合わせて医療をすすめます

◎ 無差別平等の医療

私たちは人権を尊重した医療をすすめます

◎ 患者負担の少ない医療

私たちは室料差額はいただきません

◎ 地域とともに歩む専門職の育成

人権感覚をもつ専門職を養成します

第3回緩和ケアシンポジウムが開催されました

さる10月27日(木)、本紙でも前回告知いたしました当院主催の第3回緩和ケアシンポジウムが西文化会館(ウェスティ)にて開催されました。今回のシンポジウムは、当院緩和ケア病棟だけでなく、ホスピス・緩和ケア全体への認知を広げることを目的に「親しみやすく」を念頭にハンドベル演奏会・講演会の2部構成で企画いたしました。当日は204名の参加者にお集まりいただき、第1部ではハンドベルの音色に聞き惚れ、第2部においては、安保先生の講演に聞き入っておられました。

今回、「これからのホスピス・緩和ケア～きちんとした医療と人情あふれる看護～」という演題での講演の中で、安保先生は幾度も「生活」という言葉を用いておられました。それは「緩和ケア病棟・ホスピスで死をむかえる」ということが決して生に対する諦めではなく、むしろ積極的に「死を含めた生」と向き合うものなのだとこのことを感じさせられるものでした。また、「WHO方式鎮痛薬使用の5原則」の利点を述べられた上でそれに対応する「裏5原則」の利点を挙げられるなど、お話の根底にはどんなに良い方法や法則であっても一律に押し付けることはできないという信念が貫かれており、患者ひとりひとりに真摯に向き合っておられる姿が印象的でした。

講演の最後には少ない時間でしたが質疑応答の場を設け、参加者からは自分や家族に関するごく個人的な質問から書物に関する概念的な質問まで幅広い質問がなされ、安保先生は講演中と同じく「答えは一律ではない」という姿勢でひとつひとつに答えておられました。



演題に入る際、安保先生は谷川俊太郎の「生きる」を引用されました。…生きているということ…今生きているということ…、死ぬときまで人間は「生きている」と感じられる環境にありたいと願うものなのではないでしょうか。日本において「ホスピス・緩和ケア」という言葉が認知されるようになって久しいですが、まだまだ一般に浸透しきってはおらず、十分に正しい理解がなされているとは言えません。ホスピス・緩和ケアに対する正しい理解は、そこで過ごす患者様の生をより豊かなものにすることが出来ます。今回、シンポジウムの開会挨拶にて院長より「地域とともに」という当院の目標が掲げられました。今後もこのような企画を通し、ホスピス・緩和ケアへの認知・理解を広げていくことは地域とともに歩む当院の役目であると感じております。



ハンドベル演奏会

会場の様子

耳原総合病院地域医療室
電話 072-241-0324
Fax ①072-241-0208
Fax ②072-241-0670
受付時間 月・水・金 午前9:00～午後7:00
火・木 午前9:00～午後5:00
土 午前9:00～午後1:00

☆☆☆お電話で患者さまのご都合に合わせ予約いただけます。

折返しFAXにて予約票をお送りします。☆☆☆

☆☆☆事前にカルテを準備してお待ちします。

カルテ作成に必要な情報をFAXして下さい。☆☆☆

☆☆☆予約当日、患者さまが受診の際

① 保険証②診療情報提供書③上記予約票をご持参下さい。☆☆☆